

明治大学政治経済学部  
西川伸一ゼミナール機関誌

# BEYOND THE STATE

第 22 号



2021・3・26

今年はコロナ禍でゼミの春合宿は早々に行わないことにした。例年であれば春合宿で学生に必ずやってもらう作業がある。「情報カード B6 京大式」として市販されているカードを半分に切ったものを各自に配布する。そこに年・組・番号・氏名、さらには自己PRを書いてもらって回収する。四月からのゼミでは、それをトランプのようにシャッフルして引いて学生を指名していくのである。私のゼミの伝統といつてよい。

このやり方をいつからはじめたかは覚えていない。いずれにせよ初期のころからだろう。というのも、きつかけははっきりしているからだ。千野栄一（一九八六）『外国語上達法』岩波新書の次のくだりを読んだのがヒントになった。同書の中で著者は「古代スラブ語の世界的権威ヨゼフ・クルツ先生」の授業の進め方を紹介している。

「先生は授業の最初の日には葉書程度の大きさの紙に、氏名・専攻・住所・電話を書いて提出させ、これがその後の授業で重要な役割を果たした。まず出席をとって、欠席の人のカードを抜き、その裏面にその日付をつける。そして残りのカードをよく切り、裏返しにしてから、授業では順に当てていかれた。一巡するとよくカードを切り、学生に自分の順番を予測させないようにし、しかも皆が公平に当るよう配慮して、質問の難易で

学生にひきかないように、裏にしたカードをめくるまで誰に当るか分からないようにふせておき（以下略）」（一七頁）

私のゼミの進め方にいろいろ批判はあろう。ただ、学生をえこひいきしないことだけは、この指名のやり方を励行することで担保されてきたと思う。ゼミのみならず、私の講義科目である国家論と現代国家分析でも同様のやり方で出席をとり、指名している。もはや手元にカードがないと授業ができないのではないか。

このように意思決定を偶然に委ねるしくみを、ゲームの理論では「偶然機構」とよぶ。たとえば、首相指名選挙の決選投票で二名の候補者が同点となった場合、くじ引きで首相が決まる（衆議院規則八条二項、参議院規則二〇条三項）。一国の首相をくじ引きで決めるとはなにごとかと憤るとしたら、それは「神」に対する冒瀆である。くじ引きの結果は「神意」であると厳粛に受け止めるべきだ。

ところが、「神意」を操ることができるといって驚く。映画『麻雀放浪記』（一九八四）に出てくる雀士・出目徳（高品格）は、麻雀で使う二つのサイコロを振って出る目を自分の思い通りに出せるのである。主人公・坊や哲（真田広之）に「コツ教えるよ」と語りかける場面もある。

閑話休題。ゼミコンパは楽しいのだが、どうも同学年同士で固まってしまふことが気になっていった。同期は放つておいても仲良くなるが、先輩・後輩だとしても垣根が

あるようだ。そこで、五年くらい前から、ゼミコンパの席をくじ引きで決めることにした。席に学年ごとに別の色で番号を書いた紙を学年が交互になるように置いていく。学生は着席前にその番号が書いてあるくじを引いて、該当の席に座るのだ。こうすれば、少なくとも隣同士は別学年になる。コンパ係の負担は増えるが、学年相互の親睦のためには代えられないと取り入れることにした。

ゼミ室内の着席もくじ引きにしようと考えたこともあったが、さすがにそれは言い出せないでいる。

話はゼミにとどまらない。偶然機構をもつと活用することで無用な対立や社会的ストレスはずつと減らすことができるのではないか。たとえば、首相の記者会見で記者が質問する。ところが、指名される社に偏りがあると、ずつと指名されない社の記者は不満を募らせているという。指名するのは内閣広報官の仕事である。たいへんな重圧だろう。これなど、記者席に番号を付けて、内閣広報官は一枚ずつ番号を記したカードを「よく切り」出た番号に従って当てていけば容易に解消されるはずだ。指名されなかった社は指名の作為を疑うはずもなく、「きようは運が悪かった」と納得するに違いない。

近年ではくじ引きで議員を決める「くじ引き民主主義」が提唱され、実際に取り入れられている。フランスやイギリスでは二〇一九年から二〇二〇年にかけて、くじ引きで選ばれた市民による全国規模の会議が開かれた(二〇二二年一月二〇日付『朝日新聞』)。

日本でも裁判員裁判が行われているのだから、くじ引き市民が議員として政策を熟議することも突飛なことではなからう。民主主義の機能不全が叫ばれて久しい。この閉塞状況を打開するには大胆な発想の転換が求められているのではないか。

二〇二一年一月二四日